広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第39号　2011．3〉

新学習指導要領に向けての授業実践３

―近現代の文学作品を入り口にした親しみやすい漢詩・漢文の学習―

富永　一登　　佐藤　大志　　朝倉　孝之　　岡本　恵子
増田　知子

１．はじめに

近頃，「孤舟」という言葉をしばしば耳にする。渡辺淳一氏の小説『孤舟』（2010，集英社）が流行の発端である。渡辺氏は定年を迎えた団塊の世代を「孤舟族」と名づけ，退職後の孤独，第二の人生に迷う寂寥感を描く。

しかし，情報氾濫といえるほどの状況の中で，「孤舟」の語が隠逸詩人，田園詩人と評される陶淵明（365－427）に由来するという指摘はどこにも見当たらない。これは，漢文の学習に対する一つの警告だと考えられないだろうか。

陶淵明は，出仕のため故郷の江州潯陽郡（江西省九江市）より京口（江蘇省鎮江市）に向かう道中，「始めて参軍鎮軍と作りて曲阿を経しときの作」という詩を作り，仕官への旅の心情を，

眇眇孤舟逝　眇眇として孤舟逝き
緜緜帰思紆　緜緜として帰思紆る

と詠う。そこには仕官に対する意気込みはなく，「孤舟」の語には，慣れ親しんだ田園での自適生活から離れる憂慮が込められている。詩はこの後，やがては故郷に帰ることを心に期して結ばれる。

ところが，隠遁宣言と言われる「帰去来の辞」では，故郷の田園に帰って春の農耕に出かける様子を，

農人告余以春及，将有事於西疇。或命巾車，或棹孤舟。（農人余に告ぐるに春の及べるを以てし，将に西疇に事有らんとす。或いは巾車を命じ，或いは孤舟に棹さす。）

と詠う。この「孤舟」には，先の故郷と離れる際の寂寥感はなく，自然と一体となって生活する喜びが込められている。それは次いで春の自然の息吹を楽しむ描写「木欣欣以向栄，泉涓涓而始流。（木は欣欣として以て栄に向かひ，泉は涓涓として始めて流る）」が続くことでも明らかであろう。

実は，陶淵明は独自の生き方を表す「孤」にこだわっていたようで，詩文中に「孤」を用いた言葉が15例あり，うち８例は先例を見ないものである。また，その半数には寂寞の憂愁は感じられず，むしろ充実した自己の生き方に対する楽しみが伝わってくる。「帰去来の辞」に見られる「孤舟」「孤松」「孤往」の３例はすべてそうである。

『詩経』の詩に１回も使われていなかった「孤」の語は，陶淵明によって新たな展開を見せ，単なる「孤独」の表現ではなくなっている。〈拙稿「「孤」を用いた文学言語の展開―陶淵明に至るまで―」（『未名』22号，2004）参照。なお，陶淵明以後の「孤舟」については，後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ―唐詩を読むために―』（2000，東方書店）参照。〉

孤独には，ロンリネスlonlinessとソリチュードsolitudeがあると言われる。疎外感にさいなまれるさみしい痛みを伴う孤独と，自己を充実させる孤独である。〈ハビエル・ガラルダ『自己愛とエゴイズム』（1989，講談社現代新書）参照〉また，「孤独は，現代をタフに，しなやかに，かつクリエイティブに生きていくために不可欠の“積極的な能力”である。これからの困難な時代を，幸福に生きるために，現代人がトレーニングしてでも身につけるべき新たな“能力”である。」（諸富祥彦『孤独であるためのレッスン』，2001，ＮＨＫブックス），「孤独はいまは，むしろのぞましくないもののようにとらえられやすい。けれども，孤独がもっていたのは，本来はもっとずっと生き生きと積極的な意味だった。」（長田弘『私の好きな孤独』，1999，潮出版社）とも言われる。

陶淵明の「帰去来の辞」は，「孤舟」が寂寥感と単純に結びつくのではないことを知り，所謂「孤舟族」の世代のみならず，思春期や青春時代においても，孤独の意味を考える恰好の教材となる。

Kazuto Tominaga, Takeshi Satoh, Takayuki Asakura, Keiko Okamoto, Tomoko Masuda: Teaching along the new course of study 3 —Studies of approachable Hanshi and Hanwen starting with modern works of literature.

このような漢語の持つ意味を教材の中から見出していくことは，まさに漢文学習の「今日的な教育課題」の重要な一つと言えよう。　（富永一登）

2．綾香「三日月」と杜甫「月夜」―媒介としての月

もはや昔の話となってしまったが，2006年レコード大賞最優秀新人賞を獲得した綾香「三日月」は，遠く離れた人への思いを月に託して，次のように歌う。

君も見ているだろう
この消えそうな三日月
つながってるからねって　愛してるからねって

月はそれを眺める人と人とを結びつけ，空間や時間の懸絶を超えて一つに結びつける。このような月を媒介とした結合は，唐詩にしばしば登場するモチーフでもある。教科書の定番教材では，李白「静夜思」や杜甫「月夜」などが，前者は月を媒介とした故郷との結合を，後者は杜甫と妻（家族）との結合を歌う。特に杜甫「月夜」の冒頭は「今夜　鄜州（ふしゅう）の月」と，鄜州の妻が月を見る姿を思い描くことで，月を媒介とした男女の双方向の関係を描出しており，綾香「三日月」と通うところがある。

綾香「三日月」は「君」が月を見ていると想定し，「つながってるからねって　愛してるからねって」という問いかけの声を聴きとる。これは別の箇所に「抱きしめながら言った　あなたの『愛してる』のひと言」とあることからも「君」の言葉と覚しい。「君」は月を媒介として問いかけてくれると，綾香は歌う。一方の杜甫は，母のように長安を思うことができない幼児の姿を頷聯で思い描く。その「可憐」な幼児の姿は，ただひとり月をひたすら眺めるしかない妻の姿を，一層愛おしく感じさせる。そして杜甫はいつか月光に照らされて，妻と寄り添う時間（とき）を尾聯で想像する。

このように綾香「三日月」と杜甫「月夜」は，同じ月を眺める相手の姿を思い浮かべ，それが更に相手への思いを募らせるという構造を共有する。しかし，両者の「月」は，その形が大きく異なる。

中国の詩に「月」とあれば，おおむねは満月，もしくは満月に近い円である。それは「団円」の象徴であり，夫婦であれば円満な状態の喩えとなる。杜甫「月夜」も満月の夜，またはそれに近い夜であり，だからこそ尾聯で，杜甫は団円（ハッピーエンド）を願う。綾香の月は三日月である。「この消えそうな」とあるように，三日月は，女性の寂しさや心細さ，また二人の現在の関係を象徴し，相手への切ない思いがそこには託されている。

川合康三氏は，花と月とは移ろいやすい一方で，永久にありつづけるという二面を持ち，中国の詩では後者が中心であって，そこに完全な状態であることを求める中国，変化し推移していくありさまを好む日本，という二つの文化の対比がありそうだと指摘する。（「月と花―和漢対比の一側面」『グローバル化時代の人文学』京都大学出版会，2007）。綾香「三日月」と杜甫「月夜」の「月」も，このような中国と日本の文化的差異という大きな枠組みの中に位置づけて考えることもできるのかもしれない。

ただし杜甫の詩は，必ずしも完全な美しさの状態にある月のみを対象とはしない。中でも「月」三首其一では，月が杜甫と長安とを結ぶ媒介として作用しており，それが「半輪」であることが届かぬ思いの切実さを暗示する（興膳宏「杜詩の月」『立命館文学』598号，2007）。この杜甫の「月」を継承し，三日の夜の月，すなわち「三日月」の美しさを新たに発見した詩人が，白居易である（橘英範「三日月と白居易」『中国文史論叢』５号，2009）。その白居易には，教科書の定番教材でもある「八月十五夜禁中独直対月憶元九」という詩がある。これもまた月を媒介とする結合を詠んだ詩だが，その尾聯には次のようにある。

猶恐清光不同見　猶ほ恐る　清光同じくは見ざらん
江陵卑湿足秋陰　江陵は卑湿にして　秋陰足（た）る

時は八月十五夜，作者の白居易は長安，友人の元稹（げんじん）（元九）は左遷地の江陵。心配なのは，彼の地は湿気が多く秋は曇りがちで，元稹がこの月を見ていないこと。ここには，相手の状況・環境によっては，月は共有できないとする発想がうかがえて面白い。月を媒介とする結合は常に可能ではない。それが可能だと信じることは，こちらの一方的な思い込みに過ぎないのかもしれないことをこの詩は示唆している。

漢文が既に日本人の素養ではなくなった現在，学習者にとって漢詩・漢文の世界は，はるか遠い存在である。学習者を漢詩・漢文の世界と向き合わせるためには，学習者と漢詩・漢文との距離を近づけるための媒介が必要であり，漢詩・漢文に対する学習者の構えを変えてゆくことが必要であろう。そのような媒介の具体例として，ここでは「月」をとりあげた。

「月の影」は，「『対立するものが対立させられる場』ではなく，『対立するものの境界目がぼやかされる場』であり」，「対立項が融合と分裂のあいだを永遠にさまよう『場』である」（ツベタナ・クリステワ「袖の月影―和歌で詠む古代日本の哲学」『國文學　解釈と教材の研究』52－３，2007，p20）。比較によって対立と差異を際立たせるのではなく，互いが「共有」できる部分を見定めて「共有」の場を設けること，そのうえで各自の差異を認め，「共有」と「個別」のあいだで考えること。これまで信じてられてきた地盤の多くが，その信頼性を失い，混沌とした状況のなかで，人々が

孤立しがちな現在だからこそ，そのようなレッスンを繰り返し，繰り返し行うことが必要なのではないだろうか。（佐藤大志）

３．授業の実際（１）

「九月九日憶山東兄弟」と「案山子」

「九月九日憶山東兄弟」王維

独在異郷為異客　独り異郷に在りて異客と為る
毎逢佳節倍思親　佳節に逢ふ毎に倍親（ますます）を思ふ
遥知兄弟登高処　遥かに知る兄弟高きに登る処（とき）
遍挿茱萸少一人　遍く茱萸を挿して一人を少（か）くを

―改訂版高等学校古典漢文編（第一学習社）―

「案山子」さだまさし

元気でいるか　街には慣れたか友達出来たか
寂しかないか　お金はあるか今度いつ帰る
城跡から見下ろせば　蒼く細い河
橋のたもとに　造り酒屋のレンガ煙突
この町を綿菓子に　染め抜いた雪が消えれば
お前がここを出てから　初めての春
手紙が無理なら電話でもいい
「金頼む」の一言でもいい
お前の笑顔を待ちわびる
お袋に聴かせてやってくれ　（以下略）

―さだまさし絵本シリーズ（サンマーク出版）

１）授業のねらい

王維17歳頃の作品である。故郷を離れて一人，科挙のため都で受験勉強に励む王維の姿は，やがては受験生として，大学生として，あるいは社会人として，親元を離れて暮らす多くの生徒たち自身に重なろう。年齢的にも状況の上からも，生徒の共感を得やすい作品だと考えられる。ところが，まだ家庭から離れた経験の少ない生徒たちにとっては，なかなかその心情を想像するところまでは届きにくい。しかも，この作品には心情をストレートに表現するような語句が無い。

漢詩の良さはその密度の濃い豊かな世界が韻律を以て語られるところにある。形式美の見事さと言っても良い。しかしそれを表面的に知って終わり，という生徒が少なくない。どこか遠い世界の話，という距離感がつきまとうのである。それを授業で克服したいと考えた。

「案山子」の歌は，若い世代でも歌う人は多いらしい。それなら，高校生にも入りやすいのではないかと考えて，導入に用いることにした。

さだまさしは25歳の時にこの歌を書いた。ヴァイオリン修業のために中学一年生から故郷を離れて東京で一人暮らしをした経験と，弟が台湾大学に留学していたときに仕送りをしていた経験とが，その背景にあるという。

携帯電話や交通機関の発達など，取り巻く環境は大きく変わったかに見える。さだは続けていう。……これ程時代は変わったのに，この歌はどんどん評価と需要が上がってゆく。「愛を持って自分のことを心配してくれ，そうして自分の帰りを待っていてくれる人」の存在感と，そういう人を求める心だろうか。……

さだが今でも話しかけている相手は「あの日の『不安に膝を抱えた自分』」，と言う。

夢を胸に期待を背に上京したさだと，王維の心情には少なからず似通ったところがある。そしてこのことは，時代を越えて心情を考える手がかりになるはずである。

２）授業の実際

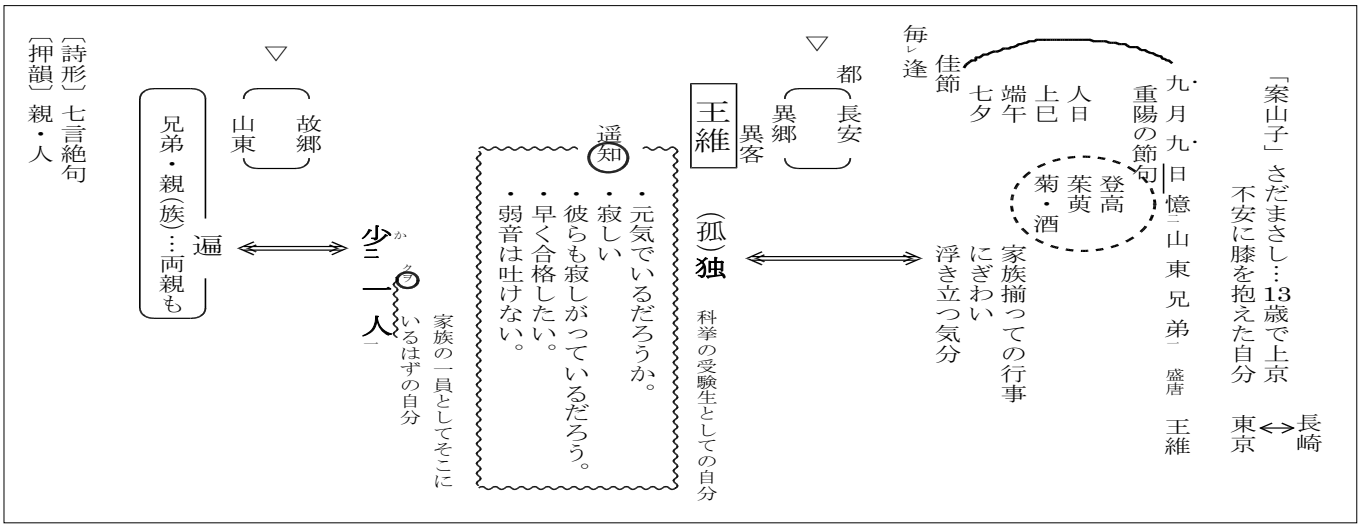
日　　時　12月２日（木）
対　　象　広大附属高等学校Ⅱ年３組（36名）
学習目標　１．詩の形式，内容をふまえて音読できる。
２．作者の心情を理解することができる。
３．作品の背景を知り，鑑賞することができる。

学習指導案

学　習　活　動	指導上の留意点
１．本時の学習目標を知る。	
①　「案山子」歌を聴く。	・歌の後，歌詞カードを見ながら気づきを発表させる。
②　歌の背景や意図等について知る。	・絵本の「あとがき」から，さだまさしの言葉を紹介し，同様の年齢・境遇で作られた作品として王維「九月九日憶山東兄弟」詩を読むことを知らせる。
２．「九月九日憶山東兄弟」詩を読解する。	
①　詩の理解に必要な事項について知る。	・七言絶句のきまり（句の構成，押韻，リズム）を復習する。 ・九月九日（重湯）について知り，詩中の関連語と他の「佳節」についても知る。
②　詩の概略を把握する。	・七言絶句のきまりに即して音読する。（指名音読・追従音読） ・長安（異郷）と山東（故郷）の二つの場所，上京以来重ねてき

③　王維の心情を読み取る。	た「佳節」という時間をおさえさせる。 ・前二句から王維の目に映ったであろう都の様子を詩の語句を手がかりに想像させる。 ・「遥知」内容はどこまでか。「知」を漢和辞典で調べさせる。 ・「一人」は誰か。その「一人」は「独り」どうしているか。 ・後二句で描かれた情景を想像させ，それを思い描く王維の心情を考えさせる。
３．「案山子」と比較しながら鑑賞し，自分の考えを書く。	・王維の心情を考えながら，音読させる。 ・二つの作品の中心は，それぞれどこか。 ・韻文という形式はどういう点で効果的か。 ・二つの作品を比較しながら，自由に考えたことを書かせる。
４．本時のまとめと次時の予告を知る。	・斉読させる

板　書



３）反省と課題

結論から言えば，心情理解の手だてとして現代の歌「案山子」を橋渡しとして用いたことは非常に効果的であった。一つには，その作品世界が互いに響き合う点があるだろう。また，どちらの作品も生徒たちと年齢が近いことも挙げられよう。そのため王維の詩の世界にすんなりと入ることができ，いずれは受験や大学へと故郷を離れるだろう自分を想像した生徒も少なくなかった。

「遥知」について，「知」の目的語を問い，また「知」字の意味を調べさせ，ここで「遥知」という王維の思いを言葉にさせたとき，抵抗感無く板書のような言葉が出て来たのもその効果と考えていいだろう。

生徒の書いたものを少し引いてみる。たとえば次のようなものがあった。

○どちらも一人。どちらも異郷。そして似たような境遇。どちらも故郷を想う。これは偶然の一致か否か。自分がいなくなった家族を想うにあたり，何を感じたのか。私なら自分がいなくても家族はやっていけると思い，自分の存在価値を疑うが，両者の詩からはそれが感じられないので，すごいなと思った。

○どちらの詩も…（中略）…家族と別れて暮らす寂しさが感じられる。共に自分ではなく，家族の側から自分について書いてあるところでよく似ている。一方で，王維の方は佳節を迎えるたびにさびしく思う自分の気持ちも述べられている。「案山子」には「手紙」や「電話」という形のコミュニケーションの可能性があるが，王維の方はそうではない。同じ寂しさでも王維の方がどうすることもできないやりきれない思いがにじんでいる。

○都会に一人孤独にいて，目的のためなので文句はいえない。だから寂しいということを口には出さず，家族の行動や言葉を想像して寂しさを紛らわせようとしているのではないだろうか。しかし，紛らわせるどころか，また寂しさがつのってくる，という繰り返しだと思う。

○一人暮らしの両者の「寂しい」や「不安」の感情が見えるところが似ている。家族と離れて一人で暮らすのは，仲が良ければなおさら辛いものだろう。また，再び会えるのがいつか分からないというところも共通しており，それが寂しさに拍車をかけているのだと思った。

反省としては,「案山子」の詞の言葉をもう少し丁寧に読ませてもよかったのではないかという点がある。１時間しかなかったためだが，せめて最後に王維の詩の音読と合わせてもう一度聴かせておけば，二つの作品の印象がもっと鮮明になったのではないだろうか。

また，書かせたものを十分に交流できなかったことにも悔いが残る。機会を作り再挑戦してみたい試みとなった。（岡本恵子）

４．授業の実際（２）

岑参「磧中作」と大岡昇平「野火」

岑参「磧中作」

走馬西来欲到天	馬を走らせて西来　天に到らんと欲す
辞家見月両回円	家を辞してより　月の両回円なるを見る
今夜不知何処宿	今夜は知らず何れの処にか宿せん
平沙万里絶人煙	平沙　万里　人煙　絶す

「三　野火」（大岡昇平『野火』）

①煙は比島のこの季節では，収穫を終わった玉蜀黍の殻を焼く煙であるはずであった。それは，上陸以来，我々を取り巻く目に見えない比島人の存在を示して，常に我々の地平を飾っていた。

②それが単なる野火であるにせよ，ないにせよ，その下に燃焼物と共に比島人がいるのは明瞭であった。そして我々にとって比島人はすべて実際は敵であった。

③私は初めて見知らぬ道を選んだことを後悔した。しかし，既に死に向かって出発してしまった今，引き返すのはいやであった。…林の奥に進むと一軒の小屋があり，人がいた。一人の比島人が眼を見開いて立っていた。…それに，これは私が生涯の終わりに見る，数少ない人間の一人であるべきであった。

④（逃げたな）と思うと怒りがこみ上げてきた。私は苦笑した。マニラで比島人の無力な憎悪の眼を見て以来，彼らに友情を求めるのがいかに無益であるか，私はよく知っていたはずである。

⑤私はその煙を眺めて立ち尽くした。…私の行く先々に，私が行くために，野火が起こるということはあり得なかった。一兵士たる私の位置と，野火を起こすという作業の社会性を比べてみれば，それは明らかであった。私は孤独な歩行者として選んだコースの偶然によって，順々に見たにすぎない。

⑥私の不安はやはり内地を出て以来の，奇妙な感覚の混乱に属していた。不安の唯一の現実的根拠は，野火のあるところには人がいるということだけであったが，しかしこの一般的な因果関係は，私のこの時の不安の原因として十分ではなかった。現に草原の野火の下には人はいない。原因は私個人に起こった事件の系列にあった。私の見た野火の数にあった。

１）授業のねらい

岑参（715～770）は三十歳のとき進士に合格し，三十五歳のとき安西節度使高仙芝の幕僚として安西に赴任した。その後北庭都護の封常清の幕僚となった。そして安禄山の乱の後に嘉州刺史となり没した。他の詩人の塞外詩には，実体験を伴わないものもあるが,「磧中作」は岑参の体験に基づく詩である。作詩の時期ははっきりしないが，安西に向かうときの作と考えるならば，長安の家に家族を残して任地に向かったタクラマカン砂漠での詩であるといえよう。

一句は空間的,二句は時間的に長い旅を描いている。三・四句はどこまでも果てしなく続く沙漠に人の存在を見ることができない心細さを描いている。

詩では人家，人の営みを「人煙」で表している。具体的にはかまどの煙・食べ物が彷彿としてくる。まさに暖かい人の生活が投影された語である。

大岡昇平（1909～1988）はレイテ島で俘虜となった体験をもとに1946年「俘虜記」を書く。小林秀雄にすすめられたからである。1948年「野火」を書く。ミンドロ島での戦いで九死に一生を得，俘虜生活を送った大岡が生み出した文学の特徴は透徹した状況・心理分析にある。

「野火」は，1944年11月のレイテ島で結核にかかった田村一等兵が部隊を追い出されて，周囲敵だらけの密林を彷徨し，最後は発狂する小説である。比島人にとっては日本軍は侵略者であり，憎悪の対象である。孤独な極限状況の中にある田村にとって，人間の存在を意味する野火は「敵」と同義語である。(①～④)

しかし，野火は田村の意識を微妙に揺さぶる。野火＝人間（敵）の存在から自己を二重化する媒体として意識するようになり，究極的には「神」に連なるものになっていく（三七　狂人日記以下)。教材としたのは，全三九章の「三　野火」と「四　坐せる者等」の二章であり，野火＝敵から自己を二重化する媒体として意識するようになる部分である。(⑤⑥)

戦争を描くことは人間を描くことである。中・高校生にとって戦争は遠い。しかし無関係ではない。生身の人間が生きていることはどういうことなのか。それを,「磧中作」と「野火」で考えさせる。

この二つの作品の最大の共通点は，作者が共に自らの体験をもって記していることである。それは感傷に溺れることのない，強靱な知性による正確な描写である。

2）授業の実際

①教材　ア，大岡昇平「三　野火」「四　坐せる者等」（『野火』）

イ，岑参「磧中作」

②学習計画

第１次　ア・イの順で読み，何に着目して読んだかを明らかにして，感想を書く。(200字)

第２次　「煙」に着目して読むとどうなるか。自分の考えを書く。

第３次　この二つの作品を読むとき，どのような観点で読むと深まるか考える。

③生徒の反応（A・B二人の生徒の場合を挙げる）

第１次

A：ア　「私」の意識に注目する。意識の私が私の身体にない。文体も知的かつ詩的である。

イ　無難に沙漠にいること，時間と空間に着目する。

B：ア　比島人の「彼」と出会ったときのほのかな仲間意識に，極限状況下での人間性が読み取れる。後半に次々と現れる野火は，人間存在の象徴というより，人間性の死の象徴に思えた。

イ　沙漠の中を馬を走らせる様子が目に浮かぶ。「月両回円」で多くの日数が経ったことを，「平沙万里」で周囲に何もないだだっ広い沙漠を表している。つまり，時間の経過と空間の変化のなさに，孤独感が生まれたということだろうか。

第２次

A：いずれも煙の下には人がいることを前提としている。イでは，遠方まで人がいないことを示し，作者の孤独（一人かどうかはわからない）を強調した表現となっている。

B：イでの煙は，人間の営みを象徴するもので，作者にとって煙は，温かみのある存在なのだろう。アでの煙は二つある。一つは人間の存在の暗示である。この場合の人間は敵である。もう一つは，私が人間である男と出会い，小さな希望とそれを打ち砕かれたことへのあきらめに近い嘆きの後に出てくる複数の野火である。それは，人がいないことから「人間」たる何かが失われた私の象徴，あるいは死の暗示のように感じられた。

第３次

A：イからわかるのは，煙と人の絶対的なつながりである。アでは，それが当然でなくなる異常さを煙の下に誰もいないという事実で伝えている。煙の持つ役割を考えることは有効である。

B：イは表現が簡潔なので情景がわかりやすく，時間の流れと空間の広がりをとらえることで，作者の心情が浮かんでくる。さらに作詩の背景を知ることでより理解が深まる。アは第二次世界大戦を生きた作者の経歴を知り，フィリピンが舞台となったことを理解した上で読んでいく。初めに出てきた野火と比島人に出会った後に出てくる野火に着目して，比島人に対する私の心情変化をよむとわかりやすい。

3）考　　察

アイともに煙が人間存在を表しているが，アではそれが不安や恐怖，イでは安心や安らぎの対象である。孤独であることは変わりないが，煙がまったく対照的な意味を持つのはアが極限状況にあるのに対して，イはそうでないからである。この2点ついて生徒は読み取っていた。「人煙」「野火」＝煙に着目することで，人間の置かれている状況と心情の読み取りに深まりが生じることもわかる。アイともに時代・人物の背景を知る資料が必要なこともうかがわれる。

現代の小説と中世の漢詩をあわせて読むことの効果は大きい。煙が人間の営みと存在を表すことを改めて認識すると同時に，置かれた状況によってそれが全く異なった意味を持つことを生徒は知る。戦争を経験した人間によって異なる言語で書かれたものを読み解くあるいは理解することの意味は何か。それは8世紀の中国と現代の日本をつなぐものがあり，それぞれの状況で生きた人間を考えることが可能になるということである。生徒の意見の交流の時間がとれなかったのが悔やまれる。　（朝倉孝之）

5．おわりに

これまでの研究を承けて，今年度は授業を実践した。生徒の反応からも見て取れるように，現代の作品は生徒と唐詩を繋ぐ上で効果的であったといえる。

比較は思考のきっかけになる。言葉を掘り下げ，表現を味わい，異質さゆえに深い思索に入ることもある。人間の真情を写した文学の醍醐味は，作品と向き合う気持ちの上に味わえるものではないか。

家族，社会，人生などのテーマに時代を越えた人間の姿を見いだしたとき，生徒は一つ広い世界を見ることになるだろう。日常から遠いかに見える作品裏に自身に共鳴する何かを感じ取ることはかけがえのない経験になる。

近現代の作品を入り口にすることのさらなる可能性を知ることのできた今回の研究であった。（朝倉，岡本）